

『新古今和歌集』熊野御幸歌群の増補について

黄 鶴翔

『新古今和歌』が竟宴後、切継時期が長く続いた。明らかに竟宴後に増補した歌は五十首以上がある。しかし、その増補の原因についての研究は十分ではない。本発表では、神祇部における熊野御幸歌群を分析し、後鳥羽院が歌を増補した原因を考察した。

まず、歌群内容に基づき、後鳥羽院が歌群を増補する際に、詞書を改訂し、「新宮参詣」歌群と「本宮参詣」歌群という構成を分けた。しかしながら、歌群の配置が実際の熊野御幸の路線と比較して「新宮」から「本宮」へという点に不自然な箇所が見られ、歌群を逆に配列した可能性が高いと指摘した。

また、歌群の構成には白河院への思いが含まれていると述べる。白河院と後鳥羽院の関係や熊野御幸の歴史的な伝統が読み取れ、特に歌群の最後の一九一一番が中心的な位置を占めていることが強調される。後鳥羽院は配列を考慮し、一九一一番歌を最後に置くには、一定の理由があると推測される。

さらに、増補前後の原因を分析すると、後鳥羽院が自らの歌を増補した背景には、熊野信仰が関連する。一九一一番後鳥羽院詠の増補には、本宮の炎上に関連し、元久三年（一二〇六）の炎上は後鳥羽院にとって神の「怒り」を表すものであった。後鳥羽院はその怒りを鎮めるために歌を奉納したと考えられる。また、承元二年（一二〇八）の本宮炎上によって後鳥羽院はさらなる打撃を受けた。熊野本宮の最初の炎上は嘉保三年（一〇九六）白河院の治世を考慮して、『新古今和歌集』に特別な配列が行われたと指摘した。このような構成によって、後鳥羽院は本宮の炎上という神の「怒り」を鎮め、神との結びつきを再確認しようとした。そして承久の乱後、承久三年（一二二一）九月の本宮炎上によって後鳥羽院にとって神との約束が破られ、歌群を隠岐本に削減したと述べた。また、伊勢神宮の増補歌を関連付けることで、当該歌群の増補時期は承元二年以後であると推測された。